

揖保川流域委員会

第2回 流域社会分科会 議事録（概要）

日 時：平成15年2月7日（金）14時～17時

場 所：龍野市 西はりま青少年館 ホール

出席者：委員8名、河川管理者2名、傍聴者24名

1. 揖保川の歴史・文化について

森本委員、増田委員、進藤委員より揖保川の歴史・文化についての話題提供があり、引き続き質疑応答が行われました。

説明の主な項目

- ・森本委員：揖保川上流域（特に山崎町）の歴史、揖保川の水運（筏流し、高瀬舟、渡し舟）川漁と川遊びについて 等
- ・増田委員：姫路市網干地域の学校と連携して取り組んでいる郷土歴史教育活動の紹介、高瀬舟による舟運と下流地域の発展について 等
- ・進藤委員：「畳堤」整備の経緯・現状、当時取り組まれた行政・地域住民とのパートナーシップについて 等

2. 人と河川との関わりのあり方について

上記の「揖保川の歴史・文化について」、及び「人と河川との関わりのあり方について」の内容を合わせ、意見交換が行われました。

委員からの主な発言（上記「1」「2」を合わせた発言内容）

現代人は生活の中で、歴史離れをしてきているのではないかと思えるが、歴史についてもっと一般の方に広げていくための努力、苦労話などがあれば教えていただきたい。

郷土学習ということで地元の高校で歴史の説明をしている。生徒たちが一番関心をもったものは、文化的なもの、産業的なものなど地域の歴史を実際に見られるようにした小学校の空き教室や、お寺を見学し、実際に住職から座禅の組み方や俳人の俳句などを教えていただいたことであった。また、町史を作られた方の蔵書を苦労して整理し、見られるようにしたところ、明治から大正、昭和の初めごろの古い書籍がたくさんあるということで子供たちも感激したようだ。地域ぐるみ、学校ぐるみで取り組んだが、最近では流域内の龍野市や新宮町、また流域外からも見学の方が訪れている。

全国でいろいろな川づくりが行われており、川の特性や歴史・文化に合わせた整備を地域住民が積極的にかかわってやっているところも確かにあるが、同じような川づくりをしている例も多くみられる。歴史文化資源や景観資源など揖保川の「川ものがたり」を作るための、資源マップのようなものをつくり、それに伴っていろいろな仕掛けを河川整備に入れ込むことができるのではないか。

行政がつくる計画書は自己満足に陥っているケースが多く、普段そこで生活し、実際に使う住民が本当に行政が思って計画を作ったようなことを考えているのかが一番のポイントになる。そういう意味で「参画と協働」を今回の整備計画の中でしっかりと考える必要がある。100年に一度の洪水を川の断面にだけに負担させてしまうと、ますます人が川から遠ざかっていくようになるのではないか。畳堤のような普段川と少しでも近い距離にありながら、何かあったと

きにそこで治水と一緒にを行うシステム、参画・協働の仕組みも考えていかなければならない。

3. 流域社会と河川整備のあり方について

揖保川の治水・利水に関する情報提供として、河川管理者より以下の説明がありました。

- (1) 引堤事業について
- (2) 利水について(農業用水、工業用水)

次に、説明に関する質疑応答と、流域社会と河川整備のあり方に関する意見交換が行われました。

委員からの主な発言

計画の降水量はどういう前提になっているのか。また、流域の土地利用によって雨水の流出量が変わってくると思うが、その計算をするときの前提はどのようになっているのか。

(河川管理者による回答：以下「回答」とする) 揖保川の場合、雨の確率で100年に1回の降雨を過去の実績データから確率評価して雨量を算出し、その雨に対する流出モデルで洪水の流量を算出している。また、都市化が進めば流出量は変わるが、揖保川では過去の実績の洪水の流出モデルで算出しており、このときのモデルと、現在の実際の土地利用状況は大きく変わっていない。

龍野市域の引堤で、重要文化財の堀家とクスノキの大木はどうなるのか。

(回答) 仮にこの図のとおり引堤する場合、堀家の住宅は移設が可能だと思うが、樹木については難しいと思う。

龍野市域の引堤に関わる費用想定はしていないのか。

(回答) 河川整備計画は、今後20～30年に行う事業内容を考えるのが目的なので、整備計画の内容を30年に1回の洪水までしか対応しないということにするのであれば、龍野の引堤は計画に入っていない。現時点でそこまで事業費の算出は行っていない。

畳堤の方は置いておくべきものになるのか。

(回答) 右岸側は何も変わらない。

堤防の上で、幅が狭いところを車が通っている区間もあるが、とても広い区間もある。堤防上は原則として車は走らないことになっているのか。

(回答) 堤防として必要な幅は決まっており、道路として使う場合は道路管理者がその幅を拡幅するというのが一般的である。堤防の上を道路として使っている所は多く、県、市町村の道路管理者が道路として使用したいということであれば道路事業と併せて実施することはありえる。

川の歴史や文化、人々の生活の英知と創造、川での産業といったものを、これからの川づくり、地域づくりにどう生かし、提言していくのか。また、土地を削ることをできるだけ少なくしようとすればダムをつくらなければならない。ダムをつくることができなければ広い土地がいる。このあたりをどう提言していくべきかと思っている。

支流の区間の河川を歩くと、井堰が土砂で埋まってしまっているものが多くある。土砂を取り除くことによって自然を回復できるのだろうか。あるいは掘削してもすぐまた埋まる可能性があるのではないかと思う。

(回答) 揖保川では隔年で河床高を計測しているが大きな変動はなく、計画河床高と比較しても大きく掘削が必要なところはないと思う。井堰については土砂が堆積し取水が困難になっているところがあるかもしれないが、それは、それぞれの管理者の把握状況である。

揖保川の井堰の中で三津井堰は昔の面影を残しており、取水の必要のない時期には堰を開いている。コンクリートで水を堰き止めればそこへ砂がたまるのは当たり前で、昔のように取水しない時期に堰を開けられるようにすればいいのではないか。

4 . 提言に盛り込む内容について

上記「1」「2」「3」において委員から出された意見を踏まえ、提言に盛り込む内容について、次回の分科会で引き続き討議することとなりました。

委員からの主な発言

人々の生活に根ざした歴史は、人々の胸の中にすくと落ちていくもので、歴史への取り組みは、はじめはごく少数の取り組みであっても、次第に膨らみや広がりを持っていくものである。このあたりが、揖保川の歴史・文化と関わる取り組みの1つのポイントだと思う。

人々の生活は、水や川と親しむこととかけ離れがちな毎日を送っており、どうすれば鋭い問題意識を持って水や川と親しむことができるのかという点が問われている。人々の自主性、自発性の問題、あるいは官と民との公共性の確立が課題であり、新たな官と民との重層的な取り組みを深めていくことが望ましい。

河川整備計画は20～30年先を見通した上での計画となるが、地方自治体の基本構想・基本計画・実施計画などは計画期間がもっと短い。今回の河川整備計画は、20～30年のスパンと同時に短期的・中期的な部分についてもさらに深めていく努力が委員会に求められている。

流域の人たちにどのように河川に対して関心を持っていただくかという点が重要で、川の歴史資源をどうすべきか、といった関心を持てるような取り組みをしていくべきである。川でのごみ拾いなども、それだけで関心を持ってもらえるかどうかはわからない。どうすれば川に対する意識をもっと持っていただけるかということについて検討を進めていただきたい。

情報交流分科会では、住民の方から直接意見を伺う集会や意見募集をしていくということを検討している。流域社会分科会としても、どういう内容を聞いてみるかということを含めて議論に参加していく必要がある。

揖保川の風景写真を公募するような取り組みを住民参加でやってみてはどうか。揖保川の歴史や文化財など客観的な情報は行政サイドが提示し、住民から生活レベルのものを提供してもらおう、といったところで関わりを持っていったらどうか。河川と流域社会との関わりは、まちづくりであり、地域活性化だと思う。それぞれの町が揖保川を舞台にして自分たちの町を元気にしていくということが大切である。

5 . 次回の分科会について

次回の委員会までもう1回分科会を開催することとなりました。実施時期は、委員の日程調整を行い2月下旬～3月上旬（予定）に行うこととなりました。

6 . 傍聴者からの発言

2名の傍聴者から次のような発言がありました。

林田川において、安富ダムができる前は、大雨のとき川の水は怖いように増えたが、ダムができてからは危険性をあまり感じなくてすんでいる。ダムの効用は非常に高いのではないかと考えている。

網干・余部地域で住民の方にアンケートを行い、揖保川に関する問題もいただいている。揖保川の左岸側の網干大橋から本町橋までの区間は道路が非常に狭いという要望が出されている。また、揖保川沿いに散歩コースや遊歩道、いこいの場をつくってほしいという要望もあり、下流部だけでなく中流部、上流部にも住民が水と親しめる場が必要である。